様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　6　月　9　日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：20520161
研究課題名（和文）　日中両国の初等・中等教育における漢字・漢文教育の比較研究

研究課題名（英文）　A comparative Study of Classical Chinese in Junior High school and High school Between Japan and China

研究代表者
李　長波（リ　チョウハ）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・講師
研究者番号：60293932

研究成果の概要（和文）：
本研究は、日中両国の漢文教育について、教育理念、共通の教材の扱い方などを比較し、両者の違いを、教材、指導書の編纂、重点の置き方などに分けて分析し、日中両国の高等学校における漢文教育の共通点（教育理念の共通点、共通の教材の共通の扱い方など）と相違点（異なる選定基準と同一教材の異なる扱い方など）を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This research disclosed the difference and similarity of Classical Chinese education in Junior High school and High school Between Japan and China. Concretely the difference in the text choice, the method of teaching manual book and the difference of the same text, and the similarity in the education idea, the same text and the teaching point of the same text was disclosed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	100,000	30，000	130，000
2009 年度	70，000	21，000	91，000
2010 年度	50，000	15，000	65，000
総　計	220，000	66，000	286，000

研究分野：漢文教育
科研費の分科・細目：文学・漢文学
キーワード：漢文教育・漢詩・漢文学・指導要綱

１．研究開始当初の背景

日本における漢字教育の方法は、大別すると、言語学者、文字学の研究者の間で、非常に専門性の高い学説が従来絶えず唱えられてきた層と、実際の教育の現場に於ける漢字教育の方法の説明という二つの層に分けられるが、二つの層の間には従来から常に大きな乖離が見られる。具体的にはたとえば教育の現場においては、研究者の研究成果と無関係に、安易な説明でもって漢字の教育を行うことが多く、漢字についての優れた学説が必ずしも現場の教育に反映されていないという問題が指摘できる。

また、日中両国を通じて見られるのは、漢字教育において、特に初等教育現場では、依然ひたすら繰りかえし書くことによる漢字習得法が主流を為し、効果的な漢字教育の方法がいまだ確立していないという現状である。そして、日本においては、戦後の漢字使用に関する政策決定の結果、現代日本語の書き言葉において、漢字使用について混乱が生じている。例えば、高校の理科系の教科書においては、常用漢字に忠実な漢字使用法が行われており、意味不明な交ぜ書きがたいへん多くなっている。一方、文科系の教科書においては、恰も常用漢字をまったく意識しないかのような漢字使用も見られる。また、常用

漢字表では、副詞や助詞に相当する漢字の言及が少ないため、漢文の送りがなについては訓読表記の揺れを来たし、それが漢文の入門期の学習者にとって無用な混乱を招いている。
一方、漢文教育に関する研究は、江連　隆著『漢文教育の理論と実践』（大修館書店、1985.10）、田部井文雄編『漢文教育の諸相：研究と教育の視座から』（大修館書店，2005.12）のように、ある程度蓄積があるが、いずれも日本の国内のみを視野に入れたものである。中国と日本の双方を視野に入れて、その教材、教育法等を比較検討したものはまだ見られない。中国国内においても、教材、教育法の研究はある程度予測がつくが、日中両国のものを充分比較検討したものは聞かない。更に、日本語の現代の文体に、漢文の訓読体がどのような影響を与えていて、それが、日本語の文体形成においてどのような役割を持つかということの考察においては先行文献が極めて少ない。特に漢文訓読体の文章を、現代日本語の文体の中に有効に生かし、学校教育にどのように反映していくかという視野から考察を加えたものは皆無である。
　本研究は、研究代表者、研究分担者のこれまでの研究蓄積をふまえ、現場での漢字・教育経験と優れた研究の蓄積を生かして、理論と実践の両面で本研究課題の遂行に大きく貢献するものとして、菊地隆雄にご協力をいただき、特に現時点での日中両国の漢字・漢文教育の比較研究に力点を置いて研究課題を設定したものである。
　一方、漢文教育については、日中の漢文教育の比較と分析によって、新たな視野を手に入れ、日本の国語教育に有効な提言を行うことを特色とする。更にまた、漢文訓読体の現代日本語における役割を追求し、現代語の文体のなかに、如何に漢文訓読体の文章を生かしてゆくかについて、教育現場に提言することは、本研究のもう一つの大きな特色であり、本研究の最終的な到達点でもある。

２．研究の目的
　本研究は、日本の国語教育における漢字、漢文教育の重要性に鑑み、日中両国の現行教科書の収集、整理をふまえて、両国の漢文教育（日本の中学・高校国語教科書の中の「漢文」、中国の語文教科書の中の「古文」を対象とする）の実態を把握し、カリキュラムの編成、題材、難易度、教育法、指導書などの総合的な分析を通じて、日本に於ける国語教育の現場の問題点を改善すべく、積極的な提言を行うためのものである。

３．研究の方法
　平成 20 年度は、日本と中国の中学・高校の現行教科書の各教科の代表的な教材を収集したこと、中国の「新課程標準」（国語）の原文を入手し、そこに謳われている教育理念と教科書の相関を分析した。日本の新しい指導要綱との比較を行った。
　平成 21 年度は、前年度に日本と中国の中学・高校の現行教科書の各教科の代表的な教材を収集し、中国の「新課程標準」を分析したのをうけて、研究代表者、研究協力者の各自の研究のほかに、①明治以降日中両国の国語教育史対照年表の作成に着手したこと（李、田担当）。②日中両国の主な教科書における漢字の使用実態を調査した（菊地、李担当）。これによって、国語教育における漢字の字体、字数、意味との関連性などの問題が浮き彫りにされた。③中国の初等、中等教育のための漢文に関する教科書・指導書を分析し、その題材別の比較検討を行った。そして、中国における初等・高等教育の実態を把握する目的で平成 21 年度に予定している研究交流活動の交渉と資料収集のために、研究代表者が計二回中国の大連、長春に赴き、実地調査に基づいて、中国吉林省長春市第十一中学（高校）と東北師範大学付属中学をモデル校として選定した。それにともない、中国側の研究協力者として、夏光民（長春第十一中学国語科主任）、張彬、李林（同教師）、李頴（東北師範大学付属中学校長）、王江春（同国語科主任）を新たに加えた。21 年度 9 月の研究交流活動についても基本合意しており、研究代表者、日本側の研究協力者（菊地隆雄・東京都小石川高校教諭、全国漢文教育学会常任理事）の両校の視察、授業参観、担当教員との座談会などを通じて、両校の実践的な取り組みを詳しく知るための準備が整った。
　平成 21 年度は当初から予定していた長春市第十一中学と東北師範大学付属中学での授業見学が、新型インフルエンザの影響で、現地入りした直後に学校閉鎖となり、実現できなかった。研究代表者李　長波、研究協力者菊地隆雄氏、田洪宝氏は、中国滞在中、今後の研究について打ち合わせを行い、交流活動の難航にともなって、研究計画を立て直した。具体的には、日中両国の共通する教材の比較対象を決定し、漢文教材の全体的な比較については、『論語』、『孟子』をめぐる両国の教材の扱い方の相違を明らかにすることとし、同一教材の扱い方の違いについては、史伝・論説・散文・詩の各ジャンル別に、史伝：「鴻門の会」、「廉頗と藺相如」、論説：韓愈「師説」、散文：陶淵明「桃花源記」、詩：唐詩・杜　甫「登高」、「春望」、李　白「月下獨酌」、「望廬山瀑布」、王　維「竹里館」、白居易「琵琶行」を比較した。
　交流活動の難航はあったものの、平成20年度は、劉　志偉（京都大学非常勤講師）を研究協力者に加え、中国の高等学校、中学国語

の指導要綱（新課程標準）の翻訳に着手したほか、代表者李　長波は、平成21年8月30日開催された第1届汉日对比语言学研讨会（第一回中日対照言語学研究フォーラム、於北京大学）において、「漢文訓読における誤読・誤釋・誤解―日本の高校国語教科書を例として―」）と題する研究発表を行いました。招待講演としては、研究代表者が鳥取県立図書館環日本海交流室の招きで、計三回にわたって、「漢字のタテヨコ・ウラオモテ」と題して、日本語、日本人にとって、漢字の持つ意味について講演を行った。

平成22年度は、漢文教材の全体的な比較と両国の教材の扱い方の相違を明らかにすることができた。同一教材の扱い方の違いについては、史伝「鴻門の会」、「廉頗と藺相如」を比較研究した。他に、日中両国の高等学校、中学国語の新しい指導要綱の方針と具体的な方策を比較するための資料として、中国の高等学校、中学国語の指導要綱（課程標準）の翻訳を完了した。研究交流活動については、中国教育学会顧問張光瓔先生、中国教育学会教育体制研究分会副事務局長丁梁両氏の協力を得て、九月二十一日に、李・田・菊地一行が北京十一学校を訪問した。当日午前中、趙謙翔先生（北京十一学校顧問、漢文教育の第一人者）と研究交流集会（研究協力者菊地隆雄氏と対談を中心に展開）を開いた。同日午後、趙謙翔先生による「愛蓮説」（二コマ100分）の授業を見学し、その後若手教員を交えて座談会を開いた。（旅費執行）この交流活動への中国側の関心が高く、『中国多媒体教育学報』（中国教育部主管、北京：清華大学編集）から全交流日程にわたって同行取材を受けた。交流集会の成功を受けて、座談会、対談内容についての報道（「中日古漢語教学交流会」専題報道）、文字、映像つき）は、急遽、平成22年12に発行する『中国多媒体教育学報』第6期に掲載することとなった。九月二十二日、一行は北京師範大学附属実験中学を訪問し、若手教員による古文の授業を見学した後、古文担当の先生方と座談会を開き、研究交流をしたほか、今後の研究交流についても意見交換を行った。

４．研究成果

本研究のおもな成果は、今後さらに論文、単行本の形で逐次されることになるが、主な研究成果の公表は、研究代表者李　長波の招待講演（三回）、学会発表一回、研究協力者菊地隆雄の学会発表一回、2010 年 9 月北京での交流活動が、「中日古漢語教学交流会専題報道」と題して、文字、映像つきで、平成 22 年 12 に発行する『中国多媒体教育学報』第 6 期に掲載されたことである。

雑誌論文では、研究代表者李　長波の論文②、④、⑤、⑦は、それぞれ文章作法の歴史的な研究であるが、漢文教育とも関連する内容であり、菊地隆雄の雑誌論文（⑧、⑨、⑩、⑪、⑫）はいずれも本研究の成果を基にしたものであり、内容的にはそれぞれの古典の題材を取り上げたものと、現代語の文体と漢文、漢文教育の方向性の 3 つに分けられるが、いずれも現行の漢文教育という制度、漢文教育の方法、今後の漢文教育に対して、積極的に提言したものであり、本研究の当初の目的はこれらの研究成果においておおむね達成されたと考えられる。研究分担者劉　志偉の論文特に⑬、⑭、⑯も、いずれも漢文教育への示唆に富むものであり、広い意味の国語教育への提言として価値があるものである。

単行本では、李　長波①は、近代の日本語教科書を選定し、それを日本語教育史、日中対照言語研究に役立てようというものであり、特に明治初期から日本語教育において漢文訓読、和文漢読の実践的な応用という事実に鑑みて、日中間の語学教育の歴史的研究への寄与が大きい。菊地隆雄の共著にかかる②、③、④については、既刊の著書に、さらに本研究によって得られた知見を盛り込んで改訂したものであり、高等学校の教員、生徒の間では好評のベストセラーになっている。これも本研究の当初の目的を具体的に実現したものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

①李　長波（単著）「**『近代日本語教科書選集』解説**」、『近代日本語教科書選集』第十巻、査読なし、pp.1-91.

②李　長波（単著）「**谷崎の言語観と『文章読本』における東洋認識**」千葉俊二・アンヌ バヤール・坂井編『谷崎潤一郎 境界を超えて』、笠間書院、2009 年 2 月、査読有、pp.231-252.

③李　長波（単著）「**人称詞和指示詞研究的幾個基本問題續稿**(人称詞と指示詞研究の基本的諸問題続稿)」『日語學習与研究』（北京・対外経済貿易大学）、2009 年第 3 期、2009 年 6 月、査読有、pp.9-15.

④李　長波（単著）「**『文筌』的朝鮮本、和刻本的版本及其在中国文学批評史上的地位和影響**(『文筌』の朝鮮本、和刻本及びその中国文学批評史上の地位と影響)」『風起雲揚 首届南京大學域外漢籍研究國際學術研討會論文集』、中華書局、2009 年 10 月、査読有、pp.36-72.

⑤李　長波（単著）「**正法眼藏の文体史的一**

考察―「動詞＋動量補語」の語法の受容を例として―」『日本語言文化研究』第八輯、学苑出版社（北京）、2008 年 1 月、査読有、pp.485-496.
⑥李　長波（単著）「**人称詞和指示詞研究的幾個基本問題(人称詞と指示詞研究の基本的諸問題)**」『語言学研究』第六輯、高等教育出版社（北京）、2008 年 5 月、査読有、pp.133-139.
⑦李　長波（単著）「**近代日本語における和漢欧文脈の混淆**」『人環フォーラム』、23,（京都大学大学院人間・環境学研究科「人環フォーラム」編集委員会編）、2008 年 9 月、査読有、pp.20-23.
⑧菊地隆雄（単著）「**志怪・伝奇小説から漢文世界へ**」、『漢文教室』大修館書店　第 194 号、2008 年 5 月、査読なし、pp.9－11.
⑨菊地隆雄（単著）「**漢文教育の行方―学校教育から生涯学習へ**」、『国語教室』大修館書店、第 190 号、2009 年 11 月、査読なし、pp.58-61.
⑩菊地隆雄（単著）「**養老猛と漢文**」、『漢文教室』大修館書店、第 196 号、2010 年 5 月、査読なし、pp.10-12.
⑪菊地隆雄（単著）「**戦国策『唇亡歯寒』について**」、『新しい漢字漢文教育』全国漢文教育学会編、第 50 号、2010 年 5 月、査読あり、pp132-141.
⑫菊地隆雄（単著）「**確かな訓読力をつけるために**―復文を用いて―」、『新しい漢字漢文教育』全国漢文教育学会編、第 51 号、2010 年 11 月、査読あり、pp.36-45.
⑬劉　志偉（単著）「**中国語における文の中核的な述語に先行する要素の配置について**」、『類型学研究』第 3 号、類型学研究会編、査読あり、pp. 141−167.
⑭劉　志偉（単著）「**『よろしかったでしょうか』 は誤用なのか**」、『歴史文化社会論講座紀要』第 8 号、京都大学大学院人間・環境学研究科編、pp. 21−30.
⑮劉　志偉（単著）「**テニヲハ研究書と連歌論書における文法事項の交渉**―「姉小路式」の記述を手掛かりに―」『日本語の研究』第 6 巻第 2 号（『国語学』通巻 241 号）、日本語学会、pp. 16～30.
⑯劉　志偉（単著）「**自動詞による間接受身文について**―先行説の批判を中心に―」『言語コミュニケーション文化』第 7 号、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会編、査読あり、pp. 145−158.
⑰劉　志偉（単著）「**『姉小路式』における係助詞の捉え方**―「か」「かは」の巻を中心として―」『人間・環境学』第 18 号、京都大学大学院人間・環境学研究科編、pp. 157−167.
⑱劉　志偉（単著）「**『姉小路式』及びその周辺に於ける『休めの類』**」、『日本語の研究』第 5 巻第 3 号（『国語学』通巻 238 号）、日本語学会編、pp. 1～16.
⑲劉　志偉（単著）「**『姉小路式』における係助詞の捉え方**―『ぞ』『こそ』の巻を中心として―」『歴史文化社会論講座紀要』第 6 号、京都大学大学院人間・環境学研究科、pp. 1−13.

〔学会発表〕（計 2 件）
①李　長波（単著）「**漢文訓読における誤読・誤釋・誤解**―日本の高校国語教科書を例として―」）、「第 1 届汉日对比语言学研讨会（第一回中日対照言語学研究フォーラム）」（2008 年 8 月 30 日、於北京大学）
②菊地隆雄（単著）「**確かな訓読力をつけるために**」、「第二十六回全国漢文教育学会大会（2010 年 5 月 29 日、於山形大学）

〔図書〕（計 4 件）
①李長波（単著）編集『**近代日本語教科書選集**』（編集、全 10 巻）、東京：クロスカルチャー出版、2010 年 2 月、査読なし。
②菊地隆雄（共著）『**漢文必携**　三訂版』、桐原書店、2008 年 10 月。
③菊地隆雄（共著）『**漢文必携**　三訂版』（チェックノート基本編）、桐原書店、2008 年 11 月。
④菊地隆雄（共著）『**漢文必携**　三訂版』（チェックノート応用編）、桐原書店、2008 年 11 月。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
李　長波（リ　チョウハ）

研究者番号：60293932

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
菊地隆雄（きくち　たかお）
東京都立小石川高校教諭
田　洪宝（でん　こうほう）
大連外国語学院客座教授
研究者番号：無
劉　志偉（リュウ　シイ）
京都大学非常勤講師